

氏名・(国籍)	楊 玉飛 (中国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第16号
学位授与年月日	平成29年3月15日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	中国仏教における『勝鬘經』諸注釈書の研究
論文審査委員	主査 教授 藤井 教公 副査 教授 落合 俊典 副査 教授 デレアヌ フロリン

## 論文内容の要旨

『勝鬘經』は先行する『如来藏經』、『不増不減經』の教理的不備を補うため、幾つかの新しい理論を提出した。しかし、これらの新しい教理には、矛盾と難解な部分が含まれている。これは正に經中で仏が嘆いた如く、「了知すべきこと難し」である。本論文が着目するのは、中国古代の仏教者たちがこれらの矛盾や難解な箇所をどのような視点や立場から見たのか、どのような理論をもって解釈したのか、彼らの解釈や理解は、それぞれどのように影響しあっているか否か、という点である。つまり、本論文は中国仏教者の『勝鬘經』理解を、その流れに沿って解明しようとするものである。

そのために本論文は中国南北朝から隋唐にかけての七本の『勝鬘經』注釈書を取り上げた。即ち、以下のA からG の七本である。

- A. 北魏正始元年(504)写 慧掌蘊『勝鬘義記』一卷(S. 02660) (慧掌蘊『義記』と略す)
- B. 六世紀中葉写 無名氏『勝鬘經疏』(S. 06388, BD02346) (無名氏『疏』と略す)
- C. 高昌延昌四年(564)写 照法師『勝鬘經疏』(S. 00524) (照法師『疏』と略す)
- D. 敦煌本 『勝鬘義疏本義』(BD04224〔玉24、北113〕、BD05793〔奈93、北114〕) (敦煌『本義』と略す)
- E. 淨影寺慧遠(523-592)『勝鬘義記』(卷下:P. 2091+ P. 3308) (慧遠『義記』と略す)
- F. 吉蔵(549-623)『勝鬘宝窟』(吉蔵『宝窟』と略す)
- G. 基撰・義令記『勝鬘經述記』(基『述記』と略す)

本稿は本論部分で、先ず如来藏思想の予備段階と言える「十大受と三聚淨戒」という章を立て、諸注釈書の十大受に対する解釈を分析した。次に、それらの解釈を理解した上で、五章(煩惱論、空・不空如来藏、如来藏の五義、如来藏染淨依持説、自性清淨心)に分けてそ

の如来蔵思想に対する理解を検討した。それらの検討によって以下の結果をまとめた。

第一章では、『勝鬘經』という經典の成立、内容、中国における受容の思想的背景、翻訳と注釈書を確認した。

第二章では、十大受と三聚淨戒を問題にして、以下の結果を得た。

(1) これら注釈書の中では、一番古いと言われる慧掌蘊『義記』は「戒」の立場で解釈していないのが判明した。それ以外の諸本は皆「戒」の立場から「十受」を理解している。更に、撰律儀戒・撰衆生戒・撰善法戒という三聚淨戒の立場で十戒を理解する場合には、二通りの解釈の流れがあることが分かった。その一は、無名氏『疏』と慧遠『義記』との三聚淨戒の外に一つの「正法戒」を設け、三聚淨戒を収めるという流れである。その二は、照法師『疏』でその端緒が見え、吉蔵『宝窟』になると漸く定型され、基『述記』の唯識の立場であっても、その定型化された説を乗り越えることができなかつた三聚淨戒を十受到に配当する流れである。

(2) 無名氏は能動の主体（能）と受動の客体（所）との二面から十受を理解し、人（心）は異なる側面において、「能・所」の立場が転換されうると見なす。照法師は撰衆生戒を「方法」と「対象」とに分け、無名氏と同じく「能・所」の立場が転換されうることを主張している。慧遠・吉蔵・基の三者は多く『菩薩地持經』を引用しながら、『菩薩瓔珞本業經』、『梵網經』の十波羅夷の第七・第八・第九・第十の四波羅夷にも当てはめて解釈している。異なるところは十受と四波羅夷の対応の順序である。これらの対応順序の相違から各師の強調しているところを多少なりとも伺い知ることができる。

第三章では、煩惱論を問題にして、以下の結果を得た。

(1) 煩惱の分類から見ると、敦煌『本義』は煩惱の分類に触れていない。慧掌蘊『義記』と照法師『疏』は四住地と無明住地との二種にまとめている。即ち、経意に沿う解釈である。無名氏『疏』、慧遠『義記』、吉蔵『宝窟』と基『述記』は五住地を「見・愛・無明」に三分している。即ち、五住地三分説を取っている。

(2) 煩惱を解釈する際に、各疏の理解は多少異なるが、殆ど「見惑」・「思惑」に分けて解釈している。また、無名氏本以外では、皆唯識の思想が伺われるので、唯識をもって『勝鬘經』の煩惱論を解釈するのが主流であると言えよう。

第四章では、空・不空如来蔵を問題にして、以下の結果を得た。

(1) 空・不空如来蔵に対する解釈は大きく二通りに分けることができる。その一は「在纏（隱）・出纏（顯）」を主張する慧掌蘊『義記』、無名氏『疏』、照法師『疏』及び敦煌『本義』の四本である。その二は「能蔵・所蔵」を主張する慧遠『義記』、吉蔵『宝窟』と基『述記』の三本である。

(2) 空・不空如来蔵を解釈する際に、経の原意に関して、慧掌蘊『義記』、照法師『疏』及び敦煌『本義』の三本は経の原意とずれがあるが、まだ経意そのものを離れず、比較的忠実に解釈している。一方、無名氏『疏』、慧遠『義記』、吉蔵『宝窟』と基『述記』の四本は殆ど経意を離れて、「空・不空如来蔵」の語意が大きな変化を遂げていた。

第五章では、如来蔵の五蔵義を問題にして、以下の結果を得た。

(1) 慧掌蘊『義記』、照法師『疏』と敦煌『本義』は經意に沿って簡単に解釈している。

(2) 無名氏『疏』は「無為法」と「有為法」を導入して解釈している。慧遠『義記』の「果」→「行」→「因」解釈は吉蔵『述記』の「因」→「行」→「果」を経て、後の基『述記』の「因」「果」に発展したと推測できる。

第六章では、如来蔵染浄依持説を問題にして、以下の結果を得た。

(1) 「如来蔵は染の依」について、諸注釈書は殆ど「不一」・「不異」の二面から論述している。「不一」は理解できるが、「不異」はなかなか理解できない。従って、この「不異」に対する解釈に注釈家たちが苦心したことが伺われる。諸注釈書を分類すると、二類に分けることができる。

第一類 解釈せず、或いは解釈できない注釈書である。この一類に属する注釈書は慧掌蘊『義記』、照法師『疏』と敦煌『本義』とである。

第二類 自分の宗派の立場から解釈している注釈書である。この一類に属する注釈書は無名氏『疏』、慧遠『義記』、吉蔵『宝窟』と基『述記』とである。

(2) 「如来蔵は浄の依」について、慧掌蘊『義記』、無名氏『疏』と照法師『疏』は如来蔵常住不変、不生不滅という特徴で理解し、刹那不住なる「六識」と「心法智」の比較の中で、如来蔵の絶対的地位を説いている。敦煌『本義』は照法師『疏』の解釈に負うところが大きい。慧遠は真・妄の対立に立って、融通しようとしているが、吉蔵は最初から真・妄の区別を取り払っている。つまり、彼は無所得中観の立場から、生死と涅槃、煩惱と菩提、衆生界と涅槃界との区別がそもそも存在しないと強調している。基は生死（染）の依を「理仏性」とし、涅槃（浄）の依を「行仏性」としているが、その根拠を示していない。

第七章では、自性清浄心を問題にして、以下の結果を得た。

(1) 慧掌蘊『義記』、照法師『疏』と敦煌『本義』は經意に沿って解釈することが多い。

(2) 無名氏は「煩惱障」と「智障」との関係をもって客塵煩惱と上煩惱との関係を説明し、更に「浄と染」という対概念をもって「心性非本浄」説を主張する感がある。後の浄影寺慧遠及び基法師も「煩惱障」と「智障」を使っているが、解釈対象が異なっている。慧遠及び基は四住地煩惱と無明住地との関係を解釈する際に、この方法を使っている。

以上の検討結果について、これらを巨視的な視野で統括すれば、以下のようである。

七本の注釈書の注釈の立場或いは釈風によって、それらには二種類の性格が伺われる。即ち、保守的な性格（經意に沿って解釈する）と進取的な性格（別の經論の説を積極的に取り込む、或いは經意に拘らず自宗の立場から解釈する）とである。

先ず、第一類の「保守的な性格」に属する注釈書は慧掌蘊『義記』、照法師『疏』と敦煌『本義』との三疏である。これらの三疏の作成年代は比較的早く、『勝鬘經』が漢訳されてから間もなくの時代であった。その時代の人々は『勝鬘經』に対する理解がまだ浅いので、殆ど經意に沿って解釈している。我々にとってこのような解釈は經意を理解するには助けとなる。しかし、問題なのは、『勝鬘經』の中には非常に難解な部分があって、ただ經意に沿うだけの解釈では、これらの部分を理解できないという点である。これらの注釈書はこのよ

うな難解な部分に対して、作意的に避けるか或いは簡単に経文を挙げて「三言両語」で説明しているに過ぎず、理解の助けとはならない。

次に、第二類の「進取的な性格」に属する注釈書は、無名氏『疏』、慧遠『義記』、吉蔵『宝窟』と基『述記』の四疏である。無名氏『疏』以外の三疏は比較に作成年代が新しい。勿論これらの四疏も経意に沿って解釈しているが、特色としては、経意に拘らず、自分の立場に立って新しい解釈方法を試している点にある。それらの試みは全部が成功とは言い難いが、ある程度では、我々の『勝鬘経』理解に新しい「構想」を提供してくれた。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は如来蔵系經典の代表的な經典の一つである『勝鬘経』が、中国仏教界においてどのように解釈され、受容されたかという問題を、注釈書の検討を通じて解明しようとするものである。

『勝鬘経』はインド中期大乘仏教の所産として、その成立の時期が種々に議論されているが、中国においては二度（一説に三度）の漢訳がなされた。このうち、中国仏教では求那跋陀羅による436年訳が最もよく用いられ、現存注釈書はほとんどこの訳によっている。

本論文の著者は、この経の中国南北朝から初唐にかけての注釈書七種のテキストを取り上げ、それらの解釈の内容を比較検討して、解釈と理解の時代的な流れを浮き彫りにしようとした。それらの注釈書は、1) 北魏正始元年(504)写 慧掌蘊『勝鬘義記』一卷(S. 02660)、2) 六世紀中葉写 無名氏『勝鬘経疏』(S. 06388、BD02346)、3) 高昌延昌四年(564)写 照法師『勝鬘経疏』(S. 00524)、4) 敦煌本『勝鬘義疏本義』(BD04224 [玉 24、北 113]、BD05793 [奈 93、北 114])、5) 浄影寺慧遠(523-592)『勝鬘義記』(巻下は P. 2091+ P. 3308)、6) 吉蔵(549-623)『勝鬘宝窟』、7) 基撰・義令記『勝鬘経述記』の七疏である。これらの疏は後の二疏を除いていずれも首尾を完全に具えたテキストではないが、経の内容に対する疏主の解釈、理解を汲み取ることは可能である。

本論文は序論と七章からなる本論、それに結論とによって構成されている。序論では問題の所在、先行研究の調査、本論文の範囲と方法について触れられている。

第一章では、『勝鬘経』の成立、内容、中国における受容の思想的背景、翻訳と注釈について概説しているが、経の成立に関する部分は記述が簡略すぎるきらいがある。

第二章では十大受と三聚浄戒を取り上げて各疏を比較し、特徴ある結果を挙げている。たとえば慧掌蘊『勝鬘義記』は十大受を「行」として解釈していること、また、三聚浄戒として解釈する場合に疏によって二類に分類できるということなどである。これらは各疏を比較してみて初めて明らかになることであり、経の解釈の時代的推移が窺われる。

第三章では経の煩惱論を取り上げる。『勝鬘経』は五住地煩惱や二種生死など、従来にない煩惱論を説いているが、これまでの研究では慧遠や吉蔵、基などの煩惱論を個別적으로取り上げて論じたものはあっても、七疏の解釈を時代順に比較検討したものはなかった。その意味

でこの検討は著者の独創性を示すものである。

第四章は空・不空如来蔵の解釈を問題にしている。この空・不空如来蔵も、経が独自に示した「空」の解釈であり、この経意に対する理解は中国仏教者にとって難解なものであることが予測されるが、著者によれば、その理解は「隠・顕」か「能蔵・所蔵」の二様に分けられ、また解釈の態度も経の原意に忠実なものと、結果的にかけ離れたものとの二分されるといふ。本来の経意から離れて独自の中国的解釈を示す例が指摘されている点で、インド仏教が中国的変容を蒙る実例という意義ある結果が示されている。

第五章では、如来蔵の五義とされる如来蔵・法界蔵・法身蔵・出世間上上蔵・自性清浄蔵の五義に対する解釈を検討している。著者は検討の結果、各疏主の意見の相違の甚だしいのは法界蔵に対する解釈で、各疏主が皆異なる解釈を示しているという。また、五義の解釈で、慧遠『勝鬘義記』の「果」→「行」→「因」とする解釈は吉蔵の『勝鬘宝窟』の「因」→「行」→「果」を経て、後の基の『勝鬘経述記』の「因」「果」に発展したと推測し、思想解釈の流れを示唆している点は重要である。

第六章では如来蔵の染浄依持説を取り上げる。これは、如来蔵が解脱涅槃の拠り所であると同時に、生死輪廻の拠り所でもあると経が説くところで、特に生死輪廻の拠り所の解釈が問題となるところである。著者の検討によれば、各疏の解釈の態度は二様に分かれるという。一は解釈できないとするもの、あるいは解釈しないもの、今一つは自身の宗派的教理解釈によって解釈を下すものの二種である。また、「浄」の依持についても同様に疏主の思想的立場に立って解釈していることが知られるとする。

第七章では自性清浄心の問題を扱っている。経が自性清浄心にして煩惱に汚染されることは了知しがたいとして、教理的解釈を放棄している問題である。これに対して著者は各疏の解釈を検討することによって、各疏主の解釈態度の相違を示し、慧掌蘊『勝鬘義記』は難解部分の解釈を回避する傾向を示すという興味深い結果を述べている。また、慧遠、吉蔵、基の三者はそれぞれ新解釈を示し、当然のことながら、時代の下るものほど精細な解釈が施されるということ述べている。

結論部分では、以上の各章のまとめを示すと共に、七疏全体を巨視的に見て、これを二類に分ける見解を披瀝している。著者によれば、まず「保守的な性格」を第一類とし、これを経意に沿って忠実に解釈を下すものとする。慧掌蘊『勝鬘義記』、照法師『勝鬘義疏』と敦煌本『勝鬘義疏本義』との三疏である。これらの三疏の作成年代は比較的早く、殆ど経意に沿って解釈している。そして難解な部分に対して、意図的に解釈を避けるか或いは簡単に解釈を下すのみという。そして、今一つを第二類「進取的な性格」のものとする。これは経意に拘らず、自分の立場に立って新しい解釈方法を試みているものであるという。それらは無名氏『勝鬘経疏』、浄影寺慧遠『勝鬘義記』、吉蔵『勝鬘宝窟』、基撰・義令記『勝鬘経述記』の四疏で、それらが示す新しい解釈の試み全部が成功とは言い難いが、ある程度新しい理解と解釈を提供するものであるとする。

著者の以上の検討は、これまで『勝鬘経』の七種の疏を並列的に比較検討した先行研究はなく、その点で独創的であり、また各章において新しい知見が見られる。また中国仏教にお

ける南北朝から初唐にかけての『勝鬘經』解釈の思想的流れを点描することができている点でも一定の評価を認めることができよう。

ただし、論旨の運びがやや性急に過ぎる点、論述の精細さに欠ける点などの瑕疵が存するが、それらは本論文の価値を大きく減ずるものではない。

よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当すると認定するものである。